

井川地区の民具収集・研究プロジェクトⅡ—井川の収集民具からみる地域性について— 外立ますみ（常葉大学造形学部 非常勤講師）

1 研究の背景

南アルプス南麓に立地する井川地区では、大井川流域に点々と小集落を形成し、山での焼畑や雑穀栽培をはじめとする畑作(茶生産)、山林伐採、運材流送、砂金採取、紙漉き、狩猟、養蚕、椎茸栽培、自然物採取などを継承しながら暮らしを立ててきた。

筆者は、2000～2002年(平成12～14)にかけて、田代集落内と対岸の菅原^{すがやま}に建つ出作小屋での民具調査を行った。そのことが井川と関わるきっかけとなり、結果、生産生業に関わる423種674点の民具を採録し、当地の人々が山からの豊かな恩恵を受けた独自の暮らしを営んできたことを学んだ。しかし、とくに本村は、1957年(昭和32)に井川五郎ダム竣工により、百数十戸が水没のため移転をよぎなくされた。そのため、民具が残っているのか、昔の暮らしを調べることは難しいのではないかと思っていたが、民具を保護した奇麗な人たちはいたのである。ダム移転から数十年を経過した現在、民具収集に向けた活動のきっかけは彼ら同心会が集めた民具から端を発している(ただし、散逸しており体系化するためには収集が必要)。人口減少が著しい井川では、豊富な知恵を持った人々が鬼籍に入り、希少になっただけでなく、井川で継承されてきた民俗技術や、民具の用途などの聞き取りができる限界に来ていると危機感を覚えたことが背景にある。

2 研究の方法

2023年度(令和5)から引き続き2024年度(令和6)も研究助成を受けることができた。とくに井川の人々のご厚意で数百点という民具の寄贈があったので、基礎調査を進めるだけでなく、今回のサブテーマに掲げた「地域性」について一步踏み込んだ分析をしたいと思った。それは例えば、環境と形態、環境と素材についてなどが挙げられる。夏には、リレー連載記事(静岡新聞)の2話分を井川民具の特徴について書かせてもらった。

もう一つの方法として、井川の人々のルーツを民具から追跡することである。「井川は奥から拓けてきて現在地に落ち着いた」という伝承がある。田代集落が信州から徐々に下ってきて伊谷・土平・沼平などに住み、やがて現在地に落ち着いたという伝承に対し、対岸の小河内集落の人々も「甲州からきた」という伝承がある。

今まで収集してきた民具からは、その分布が内陸(甲州・信州)を向いていることを感じさせる事例が多数出てきている。大井川を挟んでの東岸西岸の文化の違いの比較や、製作民具と流通民具の追跡も引き続き視野に入れながら、民具の形態(モノ情報)と史実や聞き取り(コト情報)とをつなげる研究を引き続き行っていきたい。

3 研究の成果

「南アルプスユネスコエコパークミュージアム(通称M:I、観光施設)」リニューアル工事のため、今年度は現地での民具の収集・整備作業は中断した。収集した数百点の民具(462件点753点が整理完了)は、いったん3階に運んだが、急遽体育館の倉庫に退避させざるを得なくなり、年度末まで校舎内に立ち入ることができなかった。

その間、文献などから歴史的な情報を整理発掘する時間が多かった。それによって、歴史的な事実と民具のあり方がつながったものもある。しかし、比較研究のためには、現地で現物を観察しなければ深まっていかない部分もあるため、心もとない状態であった。次年度は現地(主に信州・甲州)へ行き、情報収集を行うことによって、周辺地域との関わりや具体的な分布があるといど描けないかと期待している。また、今年度から30代の男性1名が井川民具の会に入り活動に協力してくれるようになった。

4 研究の意義と展望

現在、東京文化財研究所を中心として、全国規模で箕や木籠の調査を行う人たちがいる。その人たちはいち早く井川に来て、地元の人から聞き取り調査をしている。その人たちによれば、木籠を作り使う地域は、信州から東北にかけての日本海側に多いが、静岡県では井川だけで、県西部の水窪周辺では確認できなかったという。井川の地域性を描くピースとして、このような情報交流は大変有意義であった。

そして、今後の課題として、ミュージアムのオープン後に収集活動を再開したいが、体育館倉庫は収蔵庫として湿度管理ができないので寄贈を受けることについても慎重にならざるをえない。実物を残す意義について発信していかねばならないと感じている。